

FIFA U-17 Women's World Cup JORDAN 2016

1. 大会全般

1) 大会概要

○大会期間 2016年9月30日～10月21日

○試合会場 開催国 ヨルダン

開催都市・会場

アンマン：Ammam International Stadium（天然芝）

King Abudullah II International Stadium（天然芝）

イルビッド：Al Hassan international Stadium（天然芝）

ザルカ：Prince Mohammed International Stadium（人工芝）

○参加国 各大陸予選を突破した15チームと開催国を加えた16チーム

○大会方式 グループステージ

4チーム総当たり戦を行い、上位2チームがノックアウトステージへ進出
ノックアウトステージ

8チームによるトーナメント方式（同点の場合はPK戦）

2) 大会結果

優勝：朝鮮民主主義人民共和国 準優勝：日本 3位：スペイン 4位：ベネズエラ

最優秀選手賞：長野風花（日本⑩）

得点王：Lorena NAVARRO（スペイン⑨）

最優秀GK賞：Noelia RAMOS（スペイン①）

フェアプレー賞：日本

3) 大会の様子

FIFA U-17 Women's World Cup（以下、U17WWCと表記）は、女子サッカーにおける育成年代で迎える初めての世界大会であり、各国の選手育成の取り組みや方向性を分析するうえで重要な大会となっている。第5回となった本大会は、西アジアに位置するヨルダンで行われた。大会前には近隣諸国で起こった内戦の影響が心配されたが、セキュリティ対策も万全であり、治安の良い国という印象を与え、大会開催に向けての準備の成果が感じられた。

FIFAが主催する女子の世界大会が西アジア（イスラム圏）で開催されることは初めてであった。スタンドには多くの女性観戦者が訪れ、ボランティアを含め大会の運営スタッフにも多くの女性に関わり、イスラム圏での女性スポーツの振興、女子サッカーの発展に大きな役割を果たす、大変意義のある大会であったと考えられる。

大会会場は天然芝ピッチが3会場、人工芝ピッチが1会場であった。天然芝ピッチは非常に良く整備されており、質の高いプレーを可能とされていたが、人工芝ピッチは完成直後とありゴムチップが浮いた状態で、イレギュラーバウンドも多く、また、選手の脚が引っ掛かることによる怪我に繋がる状況もあり、プレーに影響を及ぼす場面もあった。

開催国のヨルダン国民はサッカーを愛する気持ちと、ホスピタリティー精神にあふれ、大会に参加するチームやサポーターに対し温かく接してくれた。特に親日的で、日本の女子サッカーのレベルの高さに敬意を表しており、多くの観戦者が自国と同じくらいの声援を送ってくれていた。また、ヨルダン対スペインの開幕戦には、約1万5千人の観客がスタンドを埋め、本大会への関心の高さと、自国の女子サッカーの発展に対する期待が感じられた。開幕戦に先立ち実施されたオープニングセレモニーも幻想的で盛大な内容の演出であった。

4) 分析の視点

JFA では常に進化を続ける世界のサッカーを分析し、その方向性を把握して育成年代の選手の指導に生かす必要があると考え、各年代の国際大会にテクニカルスタディーグループ (TSG) を派遣してきた。

近年の U17WWC では、「インディビジュアル (「個」) のベース」、「コレクティブ (グループとして機能する) なフットボールへの取り組み」の両者を分析することで、各国の育成への取り組みがどの方向へ向かっているのかを確認できる場となっている。また、前回大会以降フル代表の国際大会も開催され、急速に変貌しつつある世界の女子サッカーの潮流が U17 年代の本大会にどのような影響を与えているかも確認できる機会である。

そこで本大会での TSG では、世界各国の戦いから U17 年代の育成の方向性を、また日本の戦いから世界における日本女子サッカーの現在地を検証し、今後の選手育成について検討した。

2. 大会のトレンド (世界トップレベルの傾向)

1) 世界のサッカーのトレンドを継承

「よりテクニカルに、スピーディーに、コレクティブに、そしてタフに」。FIFA Women's World Cup CANADA 2015 大会において、JFA の TSG が報告したように世界のサッカーの進化に男女差は無く、世界の女子のトップレベルのサッカーは、世界のサッカーのトレンドを継承している。この傾向は、本大会のトップレベルのチーム同士の戦いにも継承されていた。

2010 年大会以来、JFA の TSG で本大会を分析してきたとおり、「グループでコレクティブなフットボールを展開する」ことはもはや当たり前のように多くにチームが志向しており、前回大会でその重要性が再認識された「テクニク」についても、ボールを止める、蹴る、運ぶ、奪うといった基本技術のレベルは大きく向上していた。

「スピード」と「タフさ」については、本大会で著しく進化を遂げたと言えるであろう。コレクティブな攻守の一体化が進み、中盤でボールを奪い合う激しさが増し、攻守の切り替えの速さも格段に進化していると言える。攻守にわたって 90 分間ハードワークができるか否かが勝敗を左右する大きな要素でもあった。選手個々を見ても、世界のトップレベルのチームではテクニクも備え、かつスピードのある選手が発掘され強化されている。中盤やゴール前での守備が激しさを増すと同時に、攻撃面でもパススピードやプレースピードの速さ、判断の速さがより求められるようになっていた。

また、本大会では、ワールドカップやオリンピックでの各国のフル代表が実践したプレースタイルに取り組むチームや、男子の代表チームのプレースタイルを積極的に取り入れていたチームも多く存在した。特に、スペインやドイツは選手個々がテクニクと状況判断力、フィジカル能力に優れ、チームとしても大人のサッカーを志向した闘いをみせていた。このことは、これらの国々が育成年代から男子の

サッカーと連携をとりながら、自らのプレースタイルの構築に一貫して取り組んでいることを示していた。

2) 世界トップトップの加速度的進化（サッカーの2極化から3グループ化へ）

前回大会のTSG報告では、コレクティブなフットボールが広がる中、コレクティブな攻守を実現するために必要な、個のテクニックと個人戦術の土台をチーム全体として充足しているか否かに分かれることが示された。

本大会においても、参加チーム全体のレベルは上がっていたが、この2極化の差が激しくなっている傾向にあった。ナイジェリアやガーナ、カメルーン、ニュージーランドなどは、攻守において個の能力に頼る、あるいは個のテクニック不足によりコレクティブにプレーできない傾向にあった。大会3位になったベネズエラもこの傾向が強かった。

さらには、個のテクニックを有しコレクティブなフットボールを志向しているグループから、トップトップの数チームが大きく抜け出てきた大会でもあった。攻撃においては、コレクティブなポジションサッカーを志向しながらも、アタッキングサードの最終局面では、個の能力に頼っているチームが多かったが、スペインやドイツ、日本はアタッキングサードでも多くの関わりと選択肢を持ちながら意図的な突破を見せていた。また守備においては、コレクティブな守備ブロックは形成しているが、形だけになり単発なアプローチに終始し、最終ラインの個の守備能力の高さで相手の攻撃を凌ぐようなチームが多かったが、スペインやドイツ、日本は前線の選手からチーム全体で連動し相手ボールを追込み、連携しながら奪いどころを意図的に作り出してボールを獲得する場面が多くみられた。

このように世界のトップレベルの数チームはさらに加速度的な進化を遂げ、U17年代の世界の女子サッカーの傾向は2極化から3グループ化へ分かれていることが示された。

3) アスリート化が進む方向にある

本大会では、「スピード」の進歩が顕著であったことは先に述べたが、この傾向は個々の選手にもあてはまった。スペイン⑩Candela ANDUJAR や⑮Eva NAVARRO、ドイツ⑦Giulia GWINN や⑰Verena WIEDER、朝鮮民主主義人民共和国⑭SUNG Hyang Sim など、スピードの速い選手が多く存在した。これらの選手はただスプリント能力に長けているだけでなく、確かなテクニックを持ち、状況判断能力にも優れている。世界のトップレベルではテクニックがあり、戦術理解度も高い、アスリートな選手を発掘し強化していることが示された。

4) 試合を決定づけるタレントの存在

2012年大会においては、多くのチームがコレクティブな守備を志向する中、傑出した個の能力で局面を打開できるプレーは減少していたが、前回大会では、コレクティブな守備に個で突破できる選手と、コレクティブな攻撃の中で優れたパフォーマンスを示せる選手の両方が育ってきていることが示された。

本大会でもその傾向は継承されていた。前回大会で得点王となったベネズエラ⑨Deyna CASTELLANOS や本大会得点王のスペイン⑨Lorena NAVARRO、朝鮮民主主義人民共和国⑩RI Hae Yon や⑭SUNG Hyang Sim、ドイツ⑮Klara BUEHL など、傑出した個の能力で強固な守備を突破し得点を挙げるストライカー、そして、スペイン⑩Candela ANDUJAR や⑮Eva NAVARRO など、確かなテ

クニックと際立ったスピードを生かしてチャンスを作り出すサイドアタッカーが多く出現した。また中盤でも大会 MVP になった日本⑩長野風花や朝鮮民主主義人民共和国⑪KIM Jong Sim、スペイン④Laia ALEIXANDRI など、テクニックを生かして攻撃を組み立て、適格な予測と豊富な運動量で相手の攻撃の芽を摘み取るボランチも上位進出チームには不可欠な存在であった。

チームとしてコレクティブなフットボールが主流となる中、U20 やフル代表ではチームとして機能しながら要所では瞬間的に個の能力で局面を打開したり、勝利を決定づけるプレーができたりする選手が必要不可欠となっている。U17 年代でも世界のトップレベルのチームでは多くの傑出したタレントを発掘し、強化していることが確かめられた。

5) 大会・試合を通じた安定性が上位進出には不可欠

中 2 日か 3 日（一部は 4 日）の間隔で連戦を闘い安定した力で上位進出を果たすためには、休息期間での課題の修正や選手のコンディショニング調整、そして選手層の厚さが不可欠な要素となる。後述するがこの点において日本は試合ごとでの修正能力が高く、毎試合メンバーを入れ替えコンディションの良い選手を先発させながらチーム力を落とさずに大会を通じて安定した闘いをみせた。一方、優勝した朝鮮民主主義人民共和国は、全試合で交代も含め出場選手が固定されており、明らかに選手のコンディションは万全ではなかった。ノックアウトステージ 1 回戦のガーナ戦では押し込まれる場面が多く、後半アディショナルタイムでの追加点により辛うじて勝ち上がることができた。そのガーナは初戦の前半、日本に圧倒され 5 失点を喫したが、試合を通じ守備組織が整備され後半は別チームのようなプレーを見せていた。続くアメリカ戦でも開始 5 分に先制を許し攻め込まれる場面が続いたが、身を呈した守備で 1 点差のまま耐え抜き後半逆転に成功し、その勢いそのままグループステージを 2 位で通過した。敗れたアメリカは大会までの 2 年半の間、無敗をキープし優勝候補の一角と言われていたが、ガーナ戦の敗北から立ち直ることができず、日本戦にも 2-3 で逆転負けを喫しグループステージで大会を去ることとなった。このように、同一チームであっても試合ごと、あるいは同じ試合の中でのパフォーマンスに変動が大きかった。U17 年代選手では、心理的に結果に大きく影響されることが改めて大きいと感じられ、精神的な安定性が重要であることが改めて認識された。

6) ベスト 4 進出チームとドイツの分析（アジア勢の闘い）

本大会のベスト 4 に進出したチームは、日本、スペイン、ベネズエラの 3 チームが前回大会に続いてのベスト 4 進出であった。このことは、これらの国が傑出したタレントの発掘と強化も含めて、育成に力を入れて取り組んでいる証しだと言えるであろう。

また、前回大会での TSG 報告では、日本以外のアジアの国々がグループリーグ敗退に終わったことを受け、この年代におけるアジアの優位性が消失しつつあることが示されたが、本大会では決勝戦がアジア地域予選突破の 2 か国での対戦となり、アジアの国々がこの年代のトップレベルにあることが改めて示された。もう一つのアジアからの出場であった開催国のヨルダンも、多くの声援の後押しを受け、攻守に粘り強く戦ったが、個のテクニックが不足しており残念ながら世界大会の水準には届いていなかった。

本大会のトレンドを作り出していたベスト 4 進出チームとドイツについて以下の通り詳しく報告する。

(1) 優勝：朝鮮民主主義人民共和国



朝鮮民主主義人民共和国は、1-4-4-2 システムを採用し、中盤での激しいプレスと最終ラインでの粘り強い守備から素早く攻撃を仕掛ける。止める、蹴るなどの基本技術のレベルも高く、ビルドアップから⑩を中心にゲームを組み立て、前線の⑩RI Hae Yon や⑭SUNG Hyang Sim の特徴を生かして得点を狙う。試合の立ち上がりは全体にコンパクトであるが、時間の経過や得点差により最終ラインが深くなり、ロングボールでのカウンター攻撃に頼り、攻守分業制になる場面も多かった。コレクティブなスタイルを志向するが、攻撃面では⑩RI Hae Yon や⑭SUNG Hyang Sim の傑出した個の突破に頼る場面も多く、また守備では球際の当たりと1対1の強さはあるが、やや形式的な守備で全員が連動して奪う機会は少なかった。セットプレーの攻撃には工夫が見られ、バリエーションも豊富であった。

鍛えられた身体能力を生かして、チーム全員がハードワークし、決められた戦術を徹底して遂行でき、勝利に対するメンタリティーも強く、良くも悪くも試合巧者である。出場するメンバーはほぼ固定されていた。

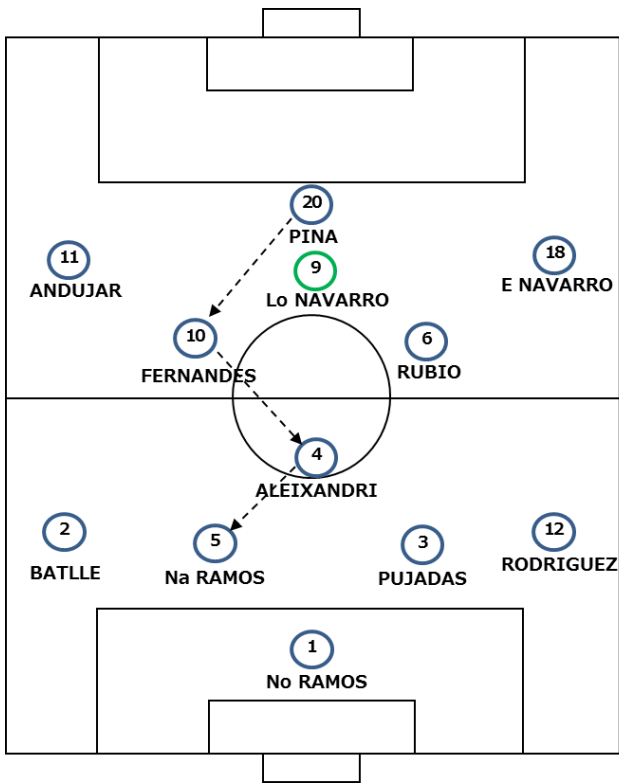
(2) 準優勝：日本



日本は、1-4-4-2 を基本として、攻守の切り替えも速く、個の確かなテクニックを生かし全員がハードワークしながらコレクティブなフットボールを披露した。攻撃は GK も含めたビルドアップから多くの関わりと選択肢を持った意図的で流動的な突破でゴールを目指していた。守備では全員が高い守備意識を持ち、コンパクトなブロックを形成し、チーム全体で連動しながら中盤で積極的にプレスをかけて意図的にボールを奪っていた。また、GK の堅実なプレーが攻守にわたりチーム全体に安定感をもたらしていた。

毎試合先発メンバーを入れ替えて、大会登録選手全員が出場したが、どの試合も安定したチーム力で戦い抜き、選手層の厚さを示した。

(3) 3位：スペイン



スペインは、1-4-3(1-2)-3 システムを採用し、選手個々の特徴を生かしたテクニカルでコレクティブなフットボールを披露した。攻撃は GK も含めながら長短のパスとドリブルも交えたビルドアップでピッチ全体に幅広くボールを動かし、両サイドの⑪ Candela ANDUJAR や⑱ Eva NAVARRO のスピードとテクニックを生かしたサイド攻撃を中心に、CF の⑳ Claudia PINA か⑨ Lorena NAVARRO のポストプレーからの中央突破など、意図的でバリエーションのある突破を仕掛けていた。守備でもチーム全体として高い守備意識を持ち、前線からコレクティブなプレスをかけてボールを奪っていた。

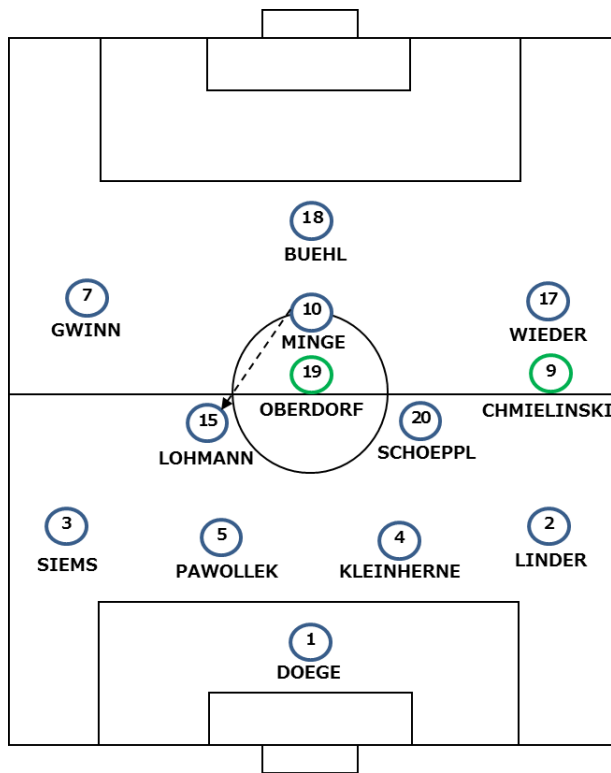
選手全員が優れたテクニックを身につけていて、状況判断能力も高い。また、スピードとアジリティー能力にも優れアスリートタイプの選手が多かった。1vs1 の守備も強く、攻守にわたってハードワークしていた。

(4) 4位：ベネズエラ



ベネズエラは、1-4-4-2 システムを中心にしながら、対戦相手や得点経過の状況に応じてポジションやシステムを頻繁に変更させながら戦っていた。堅守速攻による攻守分業型のサッカーであった。攻撃は傑出したタレントである⑨ Deyna CASTELLANOS の個人能力に頼り、守備はマンツーマンマーク気味に相手選手に対応し、全員が 1vs1 に強く、激しく粘り強く守り抜いていた。準決勝以降は相手のコレクティブで強固な守備に対し⑨ Deyna CASTELLANOS が力を発揮できずに、劣勢な試合展開となっていた。

(5) ドイツ



ドイツは1-4-2-3-1を基本としながら、攻撃、守備そしてスピリットにも男子化が伝わってくるような完成度の高いチームであった。個々のテクニックと戦術理解度が高く、チーム全体で攻守にわたりハードワークし、統一感のある闘いをしていった。守備から攻撃への切り替えが速く、相手の守備が整う前にゴールへ向かう意識が高い。カウンターができない時には、ピッチ全体の幅と厚みのあるコレクティブなビルドアップからダイナミックで意図的な攻撃を仕掛けていた。スピードとテクニックのあるサイドアタッカー⑦Giulia GWINN や⑱Verena WIEDER の突破力を生かしたサイド攻撃や、CFの⑱Klara BUEHLを基点とした中央突破など攻撃のバリエーションも豊富であった。チーム全体の守備意識が非常に高く、ボールを失った瞬間に相手にプレッシャーを掛け、相手に意図的な攻撃の形を作らせない。個々の守

備能力や戦術理解力が高く、コンパクトでコレクティブに全員が連動し意図的にボールを奪っていた。最終ラインとボランチでのリスクマネジメントも良く、特にセンターDF④Sophia KLEINHERNE と⑤Tania PAWOLLEK、GK①Leonie DOEGE が連携した堅守が光っていた。

3. 技術・戦術的分析

1) 攻撃

(1) ボールを奪ってからのファストブレイク

世界の潮流でもあるテクニカルでスピーディーは、女子サッカーにおいても共通である。勝ち上がるための必要な要素として、いかにボールを奪いスピーディーに攻撃へ切り替えられるか、そしてそれが意図的で関わりや選択肢があるかが重要であった。攻守一体化の中で攻撃しながらリスクマネジメントし、ボールを失うと同時に積極的に奪い返す守備を行い、奪ったボールを相手守備が整う前に先手を取り主導権を握れるか、そうした意識の高さを兼ね添えたチームが上位に進出したと言える。

(2) GKも含めた意図的なビルドアップ

本大会ドイツ、スペインなどにみられるワイドな3トップを配置し、幅と厚みを持ったゲームにおいて、GKが戦術的に関わり両サイドまたは中央と意図的なビルドアップを行い攻撃に深みと安定感を与えていた。上位進出チームにはゴールを目指しながらも状況に応じて組み立て直し、意図的にGKに関わりゴールに直結するような効果的なパスもみられた。GKも含めて意図的にビルドアップを行い、安定したゲーム運びができるか否かが、世界で戦う上で一つのファクターになっていた。GKのボールコントロールやキックの技術などテクニックも重要である。

(3) 意図的なアタッキングサードの崩し

アタッキングサードでの仕掛けは、積極性があり個人での突破も多くみられた。各国テクニックを持ち合わせた選手も多くいた。ゴール前での積極的な仕掛けがある中で効果的に関わり、意図的に崩すことが必要とされた。身体能力や個人技術はあるものの組織的に関わることができず単調な攻撃になるチームもあった。トップチームには戦術的な理解もあり、ゴール前の状況を認知しボールホルダーに対して、いつ、だれが、どこへ動き出すのか、そうした効果的で意図的な関わりを持ちゴール前を崩していた。

(4) ストライカーとサイドアタッカーの存在

ドイツに観られるストライカー⑩Klara BUEHL、サイドアタッカー⑦Giulia GWINN や⑰Verena WIEDER の魅力ある攻撃はその意図と狙い、ゴールを奪う意識の高さはこの年代の基準になっていた。ボールコントロール、そしてゴール前の閃きのあるアイデアを持ったストライカー、サイドアタッカーは両サイドからゴールを目指しながらシュートやクロスなど選択肢を持ち、常に脅威を与えていた。またベスト4で日本に敗れたものの、スペインにおいてもドイツを上回るポジションをしながら両サイドアタッカー⑪Candela ANDUJAR や⑱Eva NAVARRO が攻守両面において関わりを多く持ち、個での突破力や、瞬間で裏を取り決定機を作るなどゲームの主役となっていた。世界におけるストライカーとサイドアタッカーは攻守に渡り関わりが多く重要な存在であった。

2) 守備

(1) コレクティブな守備ブロックの形成

各国の守備において戦術的な違いはあるが、ボールを奪う、ゴールを守ることに違いはない。奪うチャンスを逃さず、積極的で意図的、且つ組織的に響き合うことによりコレクティブとなり、相手に自由を与えずボールを奪うことが出来る。対戦相手の違い、ゲームの流れや得点差、時間帯など、いかに相手の良さを消し守備においてどれだけ主導権を握れるかは大きなファクターである。大会上位はこうした守備意識があり意識されているが、テクニックの差から積極的に行くがコンパクトにならない、または積極的に行けず自由を与えてしまうチームもある。

(2) ディフェンディングサードでの堅守

積極的にゴールへ仕掛ける、日本、ドイツ、スペインなどは、守備への切り替えの早さは本大会でも特に積極的で効果的だった。どのチームも1stDFが非常に明確で瞬時に関わりも多くなる。日本の意図的で組織的な切り換え、ドイツやスペインなどは両サイドアタッカーが積極的にゴールへ仕掛けるが、相手のボールになるとスプリントして一気にプレスバックする。徹底した切り換えの意識の高さを感じた。世界で戦うためには攻守一体は当たり前となっている。ゴール前の守備においてもDFのゴールを守る意識の高さが際立った。積極的にボールへアプローチし、チャレンジ&チャレンジの連続を繰り返しシュートさせない、ゴールさせない、粘り強く対応する。こうした対応を90分集中しやり遂げる忍耐と精神力が必要であった。

(3) ボールを奪いきるスキル（球際の強さ）

世界レベルでは球際の闘いは必要不可欠である。本大会においてもその闘いは激しく、相手の自由を奪い規制しボールを奪っていた。戦術的な意図や戦い方はあるが、サッカーの原点でもあるボールを奪う球際の闘いは、より激しく奪うチャンスを逃さない。スピードに乗った相手のドリブルに対しても、アプローチにテクニックを加えスピードをコントロールし、相手とボールの間に身体の軸を入れボール

を奪い攻撃へ切り替える。こうしたボールを奪いきるスキルの高さがみられた。

(4) クロスに対する守備

突出したストライカーやサイドアタッカーの存在がある中で、それに対応すべく積極的で粘り強い守備意識はあるものの、クロスからの失点やピンチが多くみられた。ゴール前の守備意識が高い反面、ボールへの執着心が強く、ボールとマークを同一視する意識、そのための視野の確保やステップワークなどが不足し、ボールウオッチャーになっていた。一瞬のタイミングで飛び込んでくる相手に対し、常にボール状況を把握し、ゴールを守る意識から逆算した同一視のポジション修正を繰り返し行うにはまだ課題が残る。そんな中、日本チームにおいてはクロスに対応した DF のマークの同一視が意識され、相手より先に触る、シュートさせない意識が強くあった。またクロスボールに対し相手とボールの間を取り GK プロテクトをし、同時にゴールカバーも行う。大会通算失点 2 点はこうした意識の高さにある。本大会におけるクロスの対応が、今後各国どのような取り組みをし、次回大会を闘うか楽しみである。

3) ゴールキーパー

(1) 3 グループ化の傾向にある

本大会、上位進出国の GK の技術レベルは確実に進歩している。しかし、GK のプレーを 3 つの視点（プレー前、プレー時、プレー後）から詳しく分析してみると、大きく 3 グループに分けられる傾向にある。一つ目はアフリカや中南米の GK に多くみられる傾向で、プレー前の予測も無く、技術レベルも低い身体能力の高さを生かした本能的プレーでボールを奪いゴールを守る。二つ目は、多くの GK にみられる、プレーの予測が乏しく守備範囲は狭いが、プレー時には堅実な技術を発揮しボールを奪いゴールを守る傾向。そして世界のトップレベルの GK といえるスペイン①Noelia RAMOS や日本①田中桃子などは、プレーの予測を伴いながら、堅実な技術を発揮し、ボールを奪いゴールを守っていた。

(2) 世界のトップ GK のプレー

ここでは、技術的に進歩している世界トップレベルの GK について、5 つのプレーから傾向を示す。

① ブレイクアウェイ

ボールを奪ってからのファストブレイクのスピードが速くなる中で、DF ライン背後の対応に関して GK も重要な役割を担っている。世界のトップレベルの GK はプレー前の予測を伴いながら、シュート場面を作らせないように積極的にプレーしていた。特にスペイン①Noelia RAMOS はペナルティーエリア外にも積極的に飛び出してプレーする場面も多くみられた。日本①田中桃子もペナルティーボックスの広い範囲に飛び出して DF と連携しながらピンチを未然に防ぐ場面が多くみられた。

② クロス

サイドアタッカーの存在が注目されたように、本大会ではサイドからの攻撃も多くみられた。サイド攻撃の多くは、低くて速いクロスが多く簡単に GK が処理できるようなクロスは少なかった。一方、セットプレーも含めサイドからのハイボールに対しては、予測を伴いながら積極的に飛び出し、混戦下でも安全確実に掴むプレーが増加していた。また、掴むことが難しいと判断した場合には、パンチングやディフレクティングによりボールを大きく弾き出し、ピンチを未然に防いでいた。積極的に GK が飛び出す背景には味方のプロテクトとゴールカバーがみられた。日本①田中桃子もクロスに対し積極的にチャレンジし確実に掴むプレーが多くみられた。しかし、ボールを弾く際には弾いたボールが真上に上がったり、相手に渡ってしまいピンチを招く場面が多かった。日本の GK は世界のトップレベルの GK と

比べ弾く技術は大きな課題であり、育成年代から取り組む必要性を強く感じた。

③ シュートストップ

トップレベルの GK は常に正しいポジションを取り続けて予測を伴いながらシュートに備えていた。またシュートを打たれる際には正しい基本姿勢から反応良くシュートを防いでいた。シュートに対する反応速度も高まり、一度セーブした後すぐに起き上がり連続してシュートに反応する動きも速くなっていた。

④ ディストリビューション

攻守が一体化する傾向にある世界の闘いでは、攻撃の起点としての GK からの配給が大切な要素を担っている。日本①田中桃子を筆頭に世界のトップレベルの GK は、相手の攻撃を防いだ後に、優先順位を意識した素早く確実なキックにより、カウンターからシュートに繋がる場面を多く作り出していた。また、アフリカ勢の GK では身体能力の高さを生かし、飛距離の長いスローイングも駆使していた。

⑤ パス&コントロール

本大会では意図的にビルドアップをするチームが増加した。相手の前線からの守備に対しては、GK も含めながら数的優位な状況を生かしたビルドアップが求められ、どのチームでも GK の積極的な関わりは増加していた。アメリカ①Lauel IVORY は左右に展開するだけでなく、相手の隙を見つけて中央のボランチの選手にパスを送る場面が多くみられた。

4) セットプレー

表 1 に示すように、前回大会に比較し、セットピースからの得点数と割合は減少した。直接フリーキックに対する GK のセービング技術の進歩、また、クロスボールに対する GK も含む対応力の向上に起因するものと考えられる。しかし、第 1 回大会から第 3 回大会と比較すると割合は高く、セットピースからの得点の重要性が高いことには変わりがないことが示された。

本大会、朝鮮民主主義人民共和国はセットピースからのプレーに工夫と豊富なバリエーションを持ち合わせており、他のベスト 4 進出チームと比較してもセットピースからの得点と割合は高い値を示した。ノックアウトステージ 1 回戦のガーナ戦では、終始押させる展開であったが、PK と後半終了間際の FK からの得点で辛くも準決勝進出を決めた。また、スペインはスローインの受け方に工夫を見せていた。トピックとしてはベネズエラのエース②Deyna CASTELLANOS がカメルーン戦で同点にされた直後のキックオフから 50m のロングシュートを決めチームに勝ち点 3 をもたらせた。

表1 U17WWCにおけるオープンプレーとセットピースの得点と割合（FIFA Technical report より引用）

	オープンプレー	セットピース	合計
ニュージーランド大会 2008	92 (81.4%)	21 (16.8%)	113 (100%)
トリニダード・トバゴ大会 2010	99 (79.2%)	26 (20.8%)	125 (100%)
アゼルバイジャン大会 2012	95 (79.8%)	24 (20.2%)	119 (100%)
コスタリカ大会 2014	79 (69.9%)	34 (30.1%)	113 (100%)
ヨルダン大会 2016	80 (76.9%)	24 (23.1%)	104 (100%)

表2 U17WWC2016におけるベスト4進出国のセットピースの得点と割合（JFA TSG 調べ）

	オープンプレー	セットピース	合計
朝鮮民主主義人民共和国	7 (58.3%)	5 (41.7%)	12 (100%)
日本	16 (84.2%)	3 (15.8%)	19 (100%)
スペイン	12 (80.0%)	3 (20.0%)	15 (100%)
ベネズエラ	5 (71.4%)	2 (28.6%)	7 (100%)

4. 日本の闘い

1) 全体

(1) 選手層の厚さ

日本は本大会において6試合（グループステージ3試合、ノックアウトステージ3試合）を戦い、登録した21名全員が試合に出場した。また、スターティングメンバーも試合ごとに替わり、唯一、全試合にスターティングメンバーとして出場し、全ての試合にフル出場したのはキャプテン⑩長野風花だけであった。対戦相手や大会の闘い方を考慮しながら毎試合スターティングメンバーを変えて戦い、出場した選手が個々の持つ特長を活かしてチームとして機能し、勝利に貢献していた。この点は、育成年代の代表チームを率いるスタッフの長期的な視野に立った選手起用の考えを感じると共に、日本の選手層の厚さ、更には選手がいろいろなポジションをこなすことができるサッカー選手としての基本的な能力と理解力が備わっているといえる。

(2) テクニックをベースに安定した闘い

日本は大会を通して常に安定した闘いをして勝ち上がった。日本が闘った試合のうち、グループステージの対アメリカ戦だけが唯一、先制を許した闘いであった。そのアメリカ戦においても先制された後もチーム全体が慌てることなく、テクニックと闘いを生かしながら、選手が連携連動する日本らしい闘い方をして逆転をした。大会を通してチーム全体のテクニックの高さが安定したポゼッションにつながり、日本代表は常に主導権を握りながら戦うことができた。試合の流れの中で押し込まれて苦しい時間

帯であっても、テクニックをベースにボールを大切にすることが志向するサッカーを見失うことなく、ひたむきに戦えることは日本の特長である。

(3) 大会を通じてチームが成長（修正能力の高さ）

日本は第1戦、第2戦と大勝をして勝ち上がったが、試合の中で課題がなかったわけではなかった。特に第3戦目のアメリカ戦では、相手のFWのスピードとパワーを活かしたシンプルな攻撃に最終ラインのズレを突かれて何度か危ない場面を作られ、DFライン背後へのロングボールに対する処理でのミスが突かれて先制点を許した。また、DFラインでのビルドアップにおいてパススピードが遅いことや、中盤で簡単にボールを失いピンチを招くことなど課題となるプレーもみられた。しかし、大会期間中のトレーニングなどの成果もあり、DFラインコントロールに関しても意思統一がはかられ、ノックアウトステージ1回戦のイングランド戦ではほぼピンチをまねくことなく無失点で切り抜けるなど、大きな改善がみられた。試合の間に行うトレーニングを観る中でも、選手自身の課題に対する認識と修正点の理解、改善に対する取り組みが適切であり、その意欲も高かった。日本の課題に対する修正能力の高さは好成績を上げる要因の一つである。

(4) 「なでしこ」らしさの具現化

本大会、日本はフェアプレー賞を受賞した。決勝まで勝ち進み、厳しい試合が続く中での受賞は評価に値する。日本はテクニックを生かしたプレーの質の高さに加えて、フェアでひたむきな戦いは現地でも称賛された。今大会を通して、開催国のヨルダンが親日の国であったこともあるが、日本に対するヨルダンサポーターの「ヤープン、ヤープン（現地の方の「ジャパン」の発音）」の応援が大変心強く、チームの力になっていた。日本代表がウォーミングアップをするためにグラウンドに出てきたときや試合後にスタンドや相手サポーターに挨拶し、礼儀正しく、リスペクトする姿勢はスタンドのサポーターからは大きな拍手と称賛を受け、大会関係者からも評価をされていた。

2) 特長

<攻撃>

(1) 安定したビルドアップ

日本は選手個々の持つテクニックを生かし、GKも含めてDFラインから安定したビルドアップを行い、確実にボールを繋ぎながら攻撃を組み立てた。この安定した攻撃の組み立ては、中盤から前線の攻撃の崩しへとつながり、チャンスを作った。DFラインからの確実なビルドアップから、中盤では正確にボールを繋ぎながら、前線の選手の優先順位を意識した突破の動きと縦パスに連携、連動して、相手の守備組織を意図的に崩す攻撃がみられた。

(2) 前線の意図的な崩し

選手同士がお互いをよく観て関わり、攻撃の崩しのイメージを共有しながらテクニックを生かし、相手の守備組織を崩す攻撃は、大会に参加したチームの中ではトップレベルの質の高さであった。また、中央を攻めることによってできたサイドのスペースをSHやSBがオーバーラップしてのクロスからの攻撃は日本の武器となった。また、日本の前線の選手は、スピードとテクニックを兼ね備えており、選手同士の関わりの中から、個の突破力を生かしゴールに迫った。日本の攻撃における個の瞬間的なスピードや緩急の変化のある攻撃は相手の守備組織を崩し、得点に繋がった。

<守備>

(1) チーム全体の守備意識の高さと統率のとれた守備

日本のチームとして統率のとれた守備組織は、相手の攻撃時にボール状況に応じて、DF ラインを細かく修正しコンパクトフィールドを作り、日本の特長であるコレクティブな守備のベースを作った。また、チーム全員の守備意識が高く、攻撃から守備への切り替えが徹底されていた。ボールを失い、攻撃から守備へと切り替わった瞬間に、ボールに近い選手がボールへプレッシャーをかけて、相手の攻撃の起点を抑えて、速攻を許さなかった。特に中盤における⑰菅野奏音、⑩長野風花の守備能力の高さは素晴らしく、攻撃時にも常に守備に切り替わったときのバランスを意識したポジションをとり、守備への予測を持ったプレーを行い、中盤で相手の攻撃の起点を抑えていた。

(2) 意図的にボールを奪う守備

日本は前線の選手の守備意識も高く、相手のボール状況に応じてボールを奪うチャンスがあれば前線から積極的にプレッシャーをかけ、1stDF が決まると選手同士が連携連動し、奪ったボールをファストブレイクに繋げ、チャンスを創った。また、プレーするゾーンに関らず、選手が連携連動したボールを奪うための意図的で組織的な守備が随所にみられ、日本の大きな特長の一つであった。

(3) GK の安定した守備

本大会において正 GK として多くの試合に出場した①田中桃子の攻守にわたる堅実で安定感のあるプレーはチームの躍進に大きく貢献をした。特に、グループステージの最終戦のアメリカとの対戦においては、唯一の失点はしたものの、判断の良いブレイクアウェイやクロスに対応でピンチを切り抜けた。また、攻撃参加においてもキック、スローのテクニックも正確で、確実に攻撃の第一歩になっていた。リザーブ GK の⑫小暮千晶、⑬水口茉優は、GK というポジションの特殊性から出場した時間は短かったものの、出場したパラグアイ戦では堅実で安定したプレーをみせると共に、試合時に常に「フォアザチーム」の意識を前面に出した言動でチームを支えた。

3) 課題 (世界のトップを目指して)

<攻撃>

(1) プレーの意図に応じたパススピード

本大会で日本は、GK も含めながら DF ラインでボールを回し、確実に組み立てを行い前線にボールを運んだ。しかし、パススピードに対する意識が低く、相手の前線の選手にプレッシャーをかけられ、追い込まれるシーンが散見された。プレーをするエリアや相手のプレッシャーの状況に応じてのパススピード、キックの種類を変える意識が必要である。また、パスの受け手にどんなプレーをさせたいかのメッセージが込められるよう、パスの質に意図を持たせたい。更に、左右の差のないキックの技術の習得は不可欠である。GK も含めた自陣からの確実な攻撃の組み立ては日本の特長であり、更にこの精度を高めていくためにキックのテクニックをあげていく必要がある。

(2) アタッキングサードでのテクニックの質 (決定力不足)

日本の攻撃において、個のスピードを生かしながら選手同士が意図的に関わる前線の崩しはゲームの中で有効に機能し、相手の守備組織を崩し、チャンスを創った。この点は日本の特長であり、相手の守備にとっては脅威ともいえるプレーではあったが、守備組織が強固になる上位チームとの対戦では、思うように得点を奪えなかった。クロス、コントロール、フィニッシュの質などの「動きながら

のテクニックの質」を更に上げる必要がある。正にテクニックの質の追及には妥協を許してはならないのである。日々のトレーニングにおいて、5cm、10cm に拘るプレーの質の追及が求められている。攻撃の崩しの場面で、より関わる選手のプレーの質あげることが重要である。

また、ゴール前のプレッシャーの厳しい状況での正確なフィニッシュは、本大会においても課題が残った。決勝戦においては朝鮮民主主義人民共和国が前半 2 本に対して日本は 14 本のシュートを打った。前後半を通して相手 7 本に対して 24 本のシュートを打ちながら、日本は得点を奪うことができず、PK 戦の末に優勝を逃した。決定力不足は日本全体の課題でもあり、ストライカーの養成も含めて、克服すべき課題である。

(3) ポストプレー

アタッキングエリアにおいて時間とスペースが限られた状況において、攻撃の崩しのバリエーションを増やすためには、前線でボールをキープし、攻撃の基点となれるポストのプレーが必要である。本大会での日本は、CF のポストプレーでボールを失いカウンターからピンチを招くシーンが散見された。精度の高い楔のパスから前を向く技術、相手ディフェンスを背負いながらもボールを失わず、攻撃の基点になるプレーは重要であり、そこに関わる選手の数を増やすことで、攻撃の選択肢を増やし、より多彩な攻撃に繋げていきたい。

<守備>

(1) ロングボールへの対応

日本は個々の選手が連携連動して、組織的に守備を行うことにより、意図的にボールを奪う積極的な守備を行った。しかし、今大会のアメリカ戦での失点にみられるように、DF ラインの裏に蹴りこまれるシンプルなボールに対する処理が悪く、ピンチを招くことがあった。また、ロングボールに対する空間認知の能力を身につけると共に、状況に応じてヘディングでシンプルに高く遠くへ弾き返すことも大切である。ボール状況に応じた予測と準備の速さと共に、下がりながらのクリアーの技術等、時にはシンプルで安全なプレーを選択する判断力とその技術が必要である。

(2) ボールを奪いきる力（球際の強さ）

本大会においても、上位に勝ち進んだチームには、どのチームにも身体能力に優れ、テクニックを兼ね備えた攻撃的な選手が存在した。朝鮮民主主義人民共和国のストライカー⑩RI Hae Yon、スピードがあり運動量が豊富な⑭SUNG Hyang Sim のような優れた選手が存在し、スピードとパワーのある突出した能力を備えた選手への対応力は課題として残った。また、コレクティブな守備により意図的に複数の選手でボールを囲み込んでも、最終的にボールを奪えず、複数の選手が置き去りになりピンチを招くシーンも散見された。相手のスピードを吸収する対応力や、重心を低くし相手とボールの間に身体を入れながら奪うスキル、さらにはスライディングタックルのスキルにさらなる向上が不可欠である。

(3) ヘディングの技術

本大会で上位に勝ち進んだチームの中で、日本のヘディングの技術には課題が多く残った。守備において単純なロングボールに対する空間認知の能力を含めて高く遠くへクリアーするヘディングの技術、バックステップを踏みながらジャンプしてのヘディングの技術、身長や体格で上回る選手との競り合いのヘディングの技術など強化をしなければならない課題であった。また、攻撃におけるヘディングシュートやヘディングでのパスの技術にも課題が残った。特に攻守のヘディングの技術は日本の女子サッカー

一全体で取り組むことが必要である。

(4) 試合の状況に応じたプレーの選択

日本は相手のスピードを活かしたシンプルな攻撃に押し込まれて苦しい態勢でプレーを強いられているにも関わらず、ボールを繋ぐのかクリアーによりピンチをしのぐのかの判断が中途半端になるプレーが多く、更に苦しいプレーの状況に追い込まれ、ボールを奪い返される場面も散見された。ボールを大切に保持することの重要性を常に意識しながらも、プレーの状況、ゲームの流れや試合の残り時間等を考慮に入れたプレーを選択することが重要である。時にはシンプルにクリアーを選択することも必要である。

5. 育成への示唆 ～世界のなでしこで在り続けるために～

日本は二大会連続で決勝戦に進出することができた。惜しくも PK 戦により準優勝となったが、その試合内容には大会関係者をはじめ、多くのサポーターから賞賛の声が送られた。U17 年代では日本のプレーがトレンドの一つとなっていることは間違いない。Japan's Way を具現化し、育成年代から取り組んでいる成果は形になって現れてきている。しかし、前述した通り、世界のトップレベルと比較すると課題も多い。さらにプレーの質の向上を目指し妥協なく追及していく姿勢を持ち続けられない限り、世界のなでしこでは在り続けられない。

1) 世界基準での個の育成

Japan's Way を具現化するには、動きながらのテクニック（技術・判断）、攻守に関わり続ける個人戦術、ハードワーク（運動量とタフさ）が必要不可欠な要素であり、これらは育成年代で身につけていなければならない。われわれ指導者は、世界のトップレベルを基準とした個の育成に励み続けなければならない。

(1) 動きながらのテクニック（技術・判断）

基本となるテクニックの追及に終わりはない。本大会、日本のテクニックの高さは評価するに値していたが、前述での課題の通り、世界のトップレベルと比較すると身につけなければならないテクニックの課題は多い。世界のトレンドとしてスピードとタフさの要素が大きく向上している。速くプレーするためには、動きながら正確にテクニックを発揮することが必要不可欠である。パススピードについては世界基準に引き上げる必要がある。そして、激しい攻防の中で相手のプレッシャーを受けながら正確にプレーできなくてはならない。特にアタッキングサードでのフィニッシュの質（決定力）も含めたテクニックの質の向上には引き続き取り組んでいかなければならない。また、ボールを奪いきるためのコンタクトスキルやスライディングタックル、ステップワークなどや、シュートとクリアー両方でのヘディング技術の向上も引き続き取り組む必要がある。

ここで言うテクニックとは、単なる技術のことだけではなく、状況に応じて判断して適切に発揮することを前提にしている。判断を伴った動きながらのテクニックは、攻守に主導権を握ることを目指す日本のサッカーにとって生命線であるといえるだろう。

(2) 攻守に関わり続ける個人戦術

攻守に関わり続けるコレクティブな日本のサッカーは多くの賞賛を浴びた。しかし世界のトップレベルのチームも日本と同様にコレクティブな試合を展開させていた。また、試合展開によっては攻撃時に動きが重なってしまったり、連動した守備がずれてピンチを招く状況も散見された。攻守に関わり続け

るコレクティブなサッカーで世界をリードし続けるためには、選手一人一人がいつ、どのように関われば効果的かを適切に判断する能力をさらに高めなければならない。そして思考を停止せずにプレーに関わり続ける判断の連続性も必要であろう。そのためには常に周囲を観察して状況を的確に把握しておく力（認知力）の向上も必要不可欠である。育成年代で個人戦術のベースを身につけておくことがコレクティブなチーム戦術の土台となるといえるであろう。

（3）ハードワーク（運動量とタフさ）

本大会の傾向として、90分間ハードワークできるか否かが上位進出には不可欠な要素であることは前述の通りである。また、攻守に関わり続け、主導権を握る日本のサッカーを実践するためには、テクニックと同じくハードワークが不可欠である。相手を上回る豊富な運動量、さらにはゲームの流れを読んでチャンスやピンチを感じ、必要なタイミングでのスプリント回数を増やすことが重要である。育成年代ではゲームの流れを読んでピンチやチャンスを感じる力を養うことと、計画的なトレーニング（ボールを使いながらが望ましい）の中から、一試合を走り切る体力を求めていく必要がある。また攻守一体化の傾向が進み、ボールの奪い合いが激しくなった世界での闘いを制するために、球際の強さを含めたタフさも日常のトレーニングから追及していく必要がある。

2) タレントの発掘

本大会のトレンドとしてアスリート化の傾向が進み、上位進出チームには傑出したタレントの存在があったことは前述の通りである。世界のなでしこで在り続けるためには、Japan's Wayを具現化するために世界基準での個の育成に取り組み続けることと同じく、傑出したタレントの発掘も重要であると考えられる。特にスピードの要素はタレント発掘で外せない要素となるであろう。ただし、ただ足が速いだけでは無く、基本のテクニックに優れ、個人戦術理解度が高くなければならぬ。発掘したタレントがサッカー選手として必要な基本を身につけてこそ世界で通じるタレントとなるであろう。また、スピード同様、高さや強さなど他人よりも秀でた特徴を持っているタレントも発掘していきたい。育成年代の指導者は個を育成することと同時に、常に新たなタレントを発掘する機会と仕組み作りにも取り組んでいく必要があるであろう。

6. まとめ

本大会では、男子同様に育成に力を入れている国が上位に進出し、その国のA代表や自国のサッカースタイルを継承しながら加速度的な進化をみせた。日本も二大会連続で決勝戦に進み、育成年代からの取り組みの方向性が正しいことが証明された。しかし現状維持は衰退を意味する。世界トップレベルの加速度的な進化に遅れをとることなく、世界のなでしこで在り続けるためには、その取り組みの質を加速度的に上げることが要求されていく。本大会での評価に満足するだけでなく、新たに挑戦する意思を持ち続けなければならないだろう。

また、本大会は三大会ぶりにアジア2チームの決勝戦となり、U17年代でのアジア勢の優位性を示す大会結果となった。このことは、「アジアを制することは世界を制する」と置き換えても良いだろう。つまりアジア予選を突破するには世界のトップになるだけの実力を備えていなければならない。U17WWC次回大会へのアジア予選はもう目前に迫っている。世界大会の結果は、われわれ指導者が関わる日常での積み重ねにかかっている。世界基準を念頭においた日常でのトレーニングで、Intensity (Playの強度) と Quality (Playの質) の追及し続けることが大変重要であると考えられる。